

動物としての人間（ヒト）

“人間は考える葦である（パスカル）^[1]”

人間にとって、「人間とは何か」という問いは、自分自身を知ることですから重要ですが、自然から見ると、ヒトは多様な動物の1つに過ぎません。生物学・生理学の煩雑な分類法に頼らずに、それぞれの動物種を簡単にわかりやすく定義する方法はないのでしょうか。ここでは、生物の存在意義であるリモデリングのためのエネルギー獲得手段＝「機能」の違いに着目して、それぞれの動物を定義してみたいと思います。「鳥」を特徴づける機能は何でしょうか。それは自律的に空を移動できる点です（注1）。ほとんどの動物が陸上・海中表層の薄っぺらな2次元平面内だけに生きているのに対して、その生活空間を自律的に3次元まで拡張させた意義は大きいと言えます。翼を有することによって、鳥は3次元世界を手に入れました。これにより、エネルギー源の獲得や生命の維持に有利なところへ自由に移動したり、上空から2次元平面を俯瞰したり、効率的に餌を捕獲することが可能となったのです。サラブレッドにとっての翼は足であり、ライオンにとっての翼は鋭い牙と爪であり、キリンにとっての翼はその長い首です。強力な機能は、その裏返しとして大きなリスク・マイナスを伴うのが常です。長距離を移動する鳥は、大気中の乱流によって常に死の高リスクに晒されます。ライオンは、その鋭い牙と強靱な体を、成功率の低い大型草食動物の狩で養うしかなく、日々がハイリスク・ハイリターン of サバイバルゲームです。キリンの首は、高い植物の実を独占できる以外、無用の長物の典型です。ひとたび翼を損傷し、飛ぶ機能を失った鳥は、それ以外の方法で餌を獲得することが難しいため、翼の損傷は生死に関わります。飛べなくなった鳥や、走れなくなったサラブレッドが、痛々しいのは、それを特徴づける機能の損失が実質的な（その動物としての）死を想起させるからではないのでしょうか。生物学的な死とは、自己再生（リモデリング）機能が失われること、です。道義的な死とは、その生物固有の特性を失うことです。そのような意味で、翼の折れた鳥は、生物学的には、まだ生きていますが、道義的には、鳥としては死んだ、と言えるのかもしれませんが。ヒト以外の動物は、道義的な死が、生物学的な死に先行します。ヒトにとっての翼は、前頭葉（脳）です。ヒトとしての道義的な死は脳死です。ヒトの生物学的な死は、動物と同様に、自律的なリモデリング機能の損失です。文明（医学）の驚異的な発展により、生物学的な死が、道義的な死に先んずるという逆転現象が生じることになりました。延命装置で生をつなぎとめる患者は「自律的」な再生機能を損失しているという意味では生物学的には死んでいますが、脳死でない限り、道義的には生きてしていると見做されます。生物の部分集合であったはずのヒトが、生物でなくなった後も存在しているとしたら、それはいったい何者なのでしょう。あるいは脳死をもって死と見なす、現代医療の定義そのものが間違っているのでしょうか。SF小説のように、肉体の滅んだ天才科学者の脳だけを現代医療で生き延びさせ、意思疎通できるとしたら、それは、生きていて、と言えるのでしょうか。この生物（自然）と社会（文明）という人間特有の2面性については、この後の人間分子論でも中心的課題の1つになります。

本題であるヒトの固有性に話を戻しましょう。ヒトを他の動物と区別する最も本質的な機能とは何でしょうか。2つの重要な機能があげたいと思います。1つは、「社会的遺伝子（ミーム）によって後天的に情報を継承する機能」、もう1つは、「4次元世界（3次元空間と時間）において自己を客観視する機能」です。1つめの機能である社会的遺伝子（ミーム）とは、リチャード・ドーキンス^[2]が提唱した概念を拡大解釈し（注2）、生物学的遺伝子（ジーン）以外に、形式知（文字・映像・画像・データ）および暗黙知（文化・慣例）によって世代を超えて継承するあらゆる文明情報（技術・知識・芸術など）と定義しましょう。2つめの機能については、碁盤の上にたくさんの駒が並べられている様子を思い浮かべてください。碁盤とは、自然界であり、駒とはそこで活動する生物としましょう。駒は全て白色であるが、1つだけ特別に黒色

でマーキングされた駒があるとします。白い駒とは自分以外の生物であり、黒い特別な駒とは自分自身です。人間は、鳥のように飛べませんが、航空機によるリアルな飛行や、映像技術による仮想的な飛行によって、自然界の3次元空間を俯瞰することが可能で、翼とは別の方法で、3次元世界を手に入れたと言ってよいでしょう。また、現在（リアルタイム）の碁盤だけでなく、過去（歴史）や将来（予測）の碁盤までも利用可能なのです。すなわち、空間だけでなく、時間軸についても、行ったり、戻ったり、する、自由度を手に入れたことを意味します。これは、技術や知識などに関する高密度な4次元情報を内包した社会的遺伝子（ミーム）の貢献なしには考えられない機能です。すなわち、人間は、社会的遺伝子を巧みに駆使しながら、4次元世界においてマーキングされた自分という存在を、碁盤の上から客観的に俯瞰することができる動物なのです。人間以外の生物が目にするのができるのは、白い駒だけであり、決して、碁盤全体の4次元世界はもちろんのこと、そこに存在している（はずの）自分自身である黒い駒を目にするにはできません。何故なら、人間以外の生物の視点（認識）は、黒い駒自身に埋め込まれており、そこから見える世界が世界の全てだからです。人間だけが、自分自身である黒い駒から遊離し、上空の全く別の視点から黒い駒と白い駒の相対関係を4次元的に俯瞰することができるのです。異種生物間においてエネルギー源の獲得競争が生じる場合、この人間特有の2つの機能が、生存戦略上、圧倒的な優位性を有することは、囲碁の勝負に置き換えれば、自明すぎるでしょう。人間が他の動物を駆逐し、その生存範囲を急速に広げている現状は、何ら不思議ではないのです。

このような人間特有の機能ゆえに、人間を特別な存在、高等な存在と見なすのは間違っています。人間は上述した2つの機能を有する動物に過ぎず、人間にとっての翼や牙や長い首は、その発達した前頭葉、というだけのことです。40億年前から遺伝的特性を変えずに細胞分裂によって不死を継続している生物がいることを忘れないでください。生の堅牢性や生存領域の広さという点において、それらの生物は最強と言えないでしょうか。哺乳類などの後発組の生物群は、狭い生存領域の隙間（ニッチ）と、各生物固有に特化されたエネルギー源（餌）をめぐって争うために、やむなく、特殊な機能を獲得し、それを複雑せざるを得なかった生物界の弱者と言えないでしょうか。隕石の衝突や気候大変動などの自然環境の激変による優勢を誇った動物種の交代劇（恐竜の絶滅など）は、ニッチにおいて繰り広げられる後発生物群同志のつば競り合いに過ぎず、不死の単細胞生物らは地球大異変の最中も、日々変わることのない平和な状態を過ごしていたに違いありません。さらに言えば、非生物である日本庭園の庭石さえも、自己再生機能を持たないために時間劣化していきただけではありますが、その時間スケールの長さは動物の比ではなく、短い寿命しか持たない動物から見れば、不死に相当するような緩やかで平穏な人生を送っていると言えるのです。

（注1）羽をもつウンカ（昆虫）やトビウオ（魚）など、鳥以外にも空を飛べる生物はいるし、鳥類でもニワトリやペンギンのように飛べないものもあります。本そのような厳密な生物学的分類を細かに行うつもりはありません。ただ、鉛直（高さ）方向に自律的に移動できる距離を考えれば、3次元空間を手に入れたと胸を張って言えるのは鳥類だけでしょう。

（注2）ドーキンスは、もともと暗黙知的な情報の伝承という意味合いで、ミームという概念を提唱しています。

参考文献

- [1] パンセ（上）（下）、パスカル著、塩川徹也約、岩波文庫
- [2] リチャード・ドーキンス、日高敏隆ほか訳、利己的な遺伝子、科学選書9、紀伊国屋書店